イギリスの初等・中等学校の授業観察基準の変遷と動向に関する一考察

坂　本　真由美

Historical and Modern day Considerations on Classroom/Lesson Observation Criteria and Indicators in English Primary and Secondary School

Mayumi Sakamoto

（2018年11月22日受理）

はじめに

本稿は、イギリス（ここではイングランドに限定）における授業観察においてどのような指標が設定されてきたのかその変遷を辿り、教員養成における指標の捉えられ方について現在の動向を考察することを目的とする。平成27年の中央教育審議会答申では、教員のキャリアステージに応じた学びや成長を支えていくため、養成・研修を計画・実施する際の基軸となる教員の育成指標を教育委員会と大学等が協働して作成するなど、連携強化を図る具体的な制度を構築することが必要であるとし、教員育成協議会の設立と教員養成における「教員育成指標」の策定の義務化が提案されている[(1)]。それは、教育委員会と教職課程をもつ大学が協力して教員育成指標を作り、教員を目指す学生も教員研修を受ける現場の教師もその育成指標を使って自己評価を行い、成長を図ることを意図しているからである。すなわち、日本においては、大学等教員養成課程における教員養成指標と、教員を採用する側の各都道府県教育委員会の教員養成指標が一致する方向で取り組みが行われている。

一方で、イギリスにおいては指標と言った場合、その用語は、教員の専門性の育成として学校評価における授業観察（Classroom Observation）とその評価の議論の中で重点が置かれてきた[(2)]。そこでは、学校教育の水準（スタンダード）と質の向上を目指し、授業観察の基準（criteria）から指標（indicator）というように、授業観察の基準が変遷してきた。したがって、本稿では、イギリスの初等・中等学校における授業観察基準とその評価作業がいかに行われてきたのかその変遷を辿り、現在の授業観察をめぐる基準と指標の動向を探る。

1．イギリスの教員養成における専門性育成評価の枠組みの概要

(1)　教員の専門性を育成するための友好的な学校内外の評価枠組み

イギリスは1988年の教育改革が行われるまで、日本のような学習指導要領に則った全国的な学校カリキュラムが存在しなかった。学校における教員の専門性育成については、政府による学校視察制度（School Inspection）と学校内における教員評価制度（Teacher Appraisal）で評価が行われていた。学校視察制度では、学校視察官（Her Majesty's Inspector、HMI）と呼ばれる、元教員や地域の識者で構成された視察官が各地域の初等・中等学校を訪問し、授業観察及び校長や教員との面談を行い、助言を与え、視察結果が日本の文科省にあたる教育省に報告されていた。HMI の学校視察は全国すべての初等・中等学校で行われるのではなく、一部の地域の初等・中等学校を抽出する形で行われ、その視察結果報告書を各学校が全国的な学校教育の傾向として参考にしてきた。

一方、教員評価は、日本の教育委員会にあたる地方当局（Local Education Authority、LEA）が作成した教員評価ガイドラインを元に、各学校内で授業観察を元に行われていた。

1970年代には、LEA も学校視察を行うようになり、HMI が訪問できない学校でも LEA の訪問視察が行われ、また、HMI と LEA の両者から学校視察を受ける場合もあり、各学校及び教員は、HMI と LEA の両者から教員の専門性育成について助言をもらえるようになった。

このようにイギリスでは、学校の外からは学校視察として学校視察官と地方教育当局から授業や教育実践につ

執筆者紹介：中村学園大学教育学部
別刷請求先：〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1　E-mail：mayusaka@nakamura-u.ac.jp

いて助言をもらい、学校内では、学校内教員による教員評価によって教員の専門性の育成が図られていた。しかしながら、教員が二重の評価を受けることが可能だった背景には、HMI も LEA も校長や教員に対して助言を行うという位置づけであり、処罰的な制度として機能していたわけではないので、友好的な関係づくりができたことにあると言われている[3]。

⑵ 教員の専門性を育成するための処罰的な学校外部評価の枠組み

各地域で友好的に行われてきた HMI の学校視察と LEA の学校視察は、教育改革における保守派の台頭により1988年教育改革法によって大きく転換をした。まず、それまでになかった全国的なカリキュラム（以下、ナショナルカリキュラム）が導入された。これによってイギリスは全ての初等・中等学校がナショナルカリキュラムに則った授業を行わなければならなくなった。次に、教員達は、ナショナルカリキュラムに則った授業を行っているかチェックがなされることになった。そのために設立されたのが、教育水準局（Office for Standard in Education、OFSTED、現在は The Office for Standards in Education, Children's Services and Skills）である。HMI と LEA が行っていた学校視察は、1992年より OFSTED が作成した学校視察基準で、OFSTED で養成された視察官によって全ての初等・中等学校が視察されるという学校視察制度に変わった。OFSTED の学校視察は助言的というよりは、ナショナルカリキュラムの水準が達成されていない学校や、教育の水準と質が不十分な学校に対し、学校改善を促す制度となった。学校改善が見られなければ廃校に追い込まれるため、学校や教員達からはそれは処罰的な制度としてみなされ、学校は OFSTED の学校視察基準に則った学校づくり、授業づくりをせざるを得なくなった。

教員評価については現在でも学校独自で行われているが、OFSTED の学校視察の準備の方が学校にとっては重大課題であり、学校における教員の専門性の育成については OFSTED の学校視察基準は基本としてみなされている[4]。

では次項からは、イギリスの学校視察制度及び教員評価制度において、教員の専門性を評価する際の中心となっている授業観察基準の変遷を辿ってみる。

2．イギリスの教員の専門性育成のための授業観察基準

⑴ 学校の教員評価における授業観察基準：授業観察後の面談討論

1992年に OFSTED が全国統一の授業観察基準を設定する前は、主に各学校における教員評価の中で授業観察が行われていた。授業観察基準は LEA のガイドラインやハンドブックを元に学校で作成され、被評価者による自己評価と評価者による授業観察、及び両者の事後対話が行われていた。例として1989年のイギリス北部のカンブリア州の公立初等教員評価ハンドブックに記載されている授業観察手続きを見てみよう（**表１**）。

カンブリア州の公立初等教員評価ハンドブックでは、

表１　カンブリア州の教員評価ハンドブックにおける授業観察の手続き内容

＜授業分析＞

授業分析は、評価の構成要素である。情報が収集された教室（授業）の観察を行い、収集した情報をもとに討論を行い、どこに焦点が定められているのかを明らかにするものである。教室観察は３種類行う。第１に一人が全体観察をし、第２に授業観察の視点を定めた２人による観察である。それぞれの教室観察の後には簡単な口頭によるフィードバックがあるが、第３に更に詳細な討論を観察後48時間以内に行う。教室観察には３時間が費やされる。教室観察後の個人面談の前には、以下の点で評価者と被評価者は同意をしていなければならない。

・児童生徒に、評価者が教室観察に来ることについてどのように説明すべきか。
・評価者は（授業内で）いつグループに参加すべきか。
・評価者は観察のみにするべきか、それとも（授業内の活動に）参加すべきか。
・メモをとってもよいか。
・子供達から情報を集めても良いか。
・いつ評価者は教室を離れるべきか。
・授業分析討論は開かれるべきか。

＜提案＞

・事前に提出された被評価者の自己評価情報は授業の焦点がどこに充てられたのか知るのに役立つ。観察される授業が決まったら、被評価者は授業目的、その授業がプログラムにいかに適応しているのか、子供達のグループの特徴について事前に説明しておかねばならない。
・評価者は、そのような子供達のグループに対する学校の学習計画を知っておかねばならない。
・観察後の討論は、特に焦点を当てた領域が明らかになるよう進まなければならない。
・討論は、審判するのではなく描写を元に行わなければならない。
・授業観察は互いの授業を観察するため練習となる。観察の中には半日から１日が費やされるものもある。被評価者が特に多くの責任を持っているならば、互いの授業を観察するのは役に立つ。

被評価者に配慮した手続きとなっており、授業観察後の面談を重視した教員評価基準が示されている。この場合の評価者は、校長、教頭のような経営陣と同僚の中堅教師であり[5]、評価者と被評価者の綿密な対話とフィードバックへの配慮が読み取れ、授業観察を通した教師の専門性の育成が双方向的に行われている。

⑵　OFSTED の授業観察基準：基準（クライテリア）に則ったグレード評価

全国的なナショナルカリキュラム導入後の1992年からは、OFSTED が提示した授業観察基準に則り、OFSTED で訓練された視察官により授業観察がなされ評価シートにグレード評価がなされることになった。授業観察のグレードは、

グレード１：多くの良い点、いくつかの素晴らしい点が見られた
グレード２：良い点はあったが、あまり主だったものはない
グレード３：ふつう
グレード４：重要な領域において不十分さが見られた
グレード５：多くの不十分さが見られた

となり、OFSTED の視察官が、授業を観察しながら達成度のグレードをつけ、コメントを記述する。OFSTED の授業観察シートについては**表２**に示した[6]。たった３日間ほどの学校滞在で、授業観察をし、グレードを付ける視察官による授業観察は、処罰的だとし、OFSTED の授業観察方法には批判が集中した[7]。

⑶　OFSTED の授業観察基準：記述作業の増加とグレードの幅の緩和

短時間の授業観察で評価のグレードを付ける OFSTED の授業観察方法は見直しがなされ、1996年には授業観察シートが新しく記述中心になりグレードも０から７に広がった（**表３**）。しかしながら、OFSTED の視察官自身の記述箇所も記述時間も増大した一方で、視察前に提出する被評価者である教員自身が作成する授業実践についての事前報告書も同時に記述欄が増え、記述作業が増えたという点で、再度、OFSTED の授業観察方法について批判が挙がった[8]。

表２　OFSTED の要求内容が含まれた授業観察シート　（1994版 OFSTED の視察官記入用）

内容
この項では、活動について簡単に記述しなければならない。児童生徒集団と、授業内で達成された段階を示さなければならない。

達成（年齢対象）：
この項では、児童が何を知り、何を理解し、何が表出されたのか、児童の年齢とコースに対し期待された達成がどのようになされたかの判断を、例を挙げて書かなければならない。
グレード：＿＿＿＿＿

達成（児童の活動への配慮）
この項では、児童の能力に関する適性と達成についての判断を記録しなければならない。参考となるのは、個々の能力の児童の達成がなされたかである。また授業内容を教えることでその段階が達成されたかも記述しなければならない。
グレード：＿＿＿＿＿

学習の質
この項では、児童によってなされた進歩の評価、学習者としての児童の能力、学習態度に焦点を当てなければならない。児童の動機付け、集中力、協力して創造しながら学習する能力についてコメントしなければならない。どの程度、児童は自分の技能を見せ、意見を述べ、説明をし、アイデアを示し、自分の行った学習を評価しているかについてコメントしなければならない。
グレード：＿＿＿＿＿

授業の質
この項では、授業が適切なレベルに向けて効果的な学習と達成を促進していたかどうかという評価に焦点を当てなければならない。その証拠として、適切なコメント、目的、内容、計画、方法の明確さを記述しなければならない。また、ペース配分、児童との関係、児童へのフィードバックが適切に構造化され、全ての児童の期待に応えるものとなっていたかどうか評価しなければならない。
グレード：＿＿＿＿＿

重要な技能への貢献度
児童の重要な技能について特筆すべきことを記述せよ。また、児童の自信と児童の言語の流暢さについても記述せよ。可能ならば、授業、学習、達成についてコメントせよ。

貢献した要素
いずれの積極的・否定的効果も＋もしくは－で記述せよ。
コメント：

表３　OFSTED の授業観察フォーム
（1996版　OFSTED の視察官記入用）

観察の内容
グレード０～７（を□の中につける）
０＝証拠不十分
２＝平均よりとても良い / 良い
４＝平均くらい / 満足
６＝平均より以下

授　業　□

反　応　□

達　成　□

進　歩　□

他の重要な証拠

⑷　OFSTED の授業観察の重要指標（key indicator）：クライテリアから指標へ

現在の OFSTED の授業観察における基準は、「Lesson Observation-key indicators」に示され、「授業観察の重要指標」と訳される。その内容は、

「環境の習慣」　「学習の習慣」
「教師の習慣」　「児童の習慣」

という第１カテゴリーとしての大きな４枠があり、それぞれ第２カテゴリーとして、「環境の習慣」には７項目、「学習の習慣」には９項目、「教師の習慣」には８項目、「児童の習慣」６項目が設定されている。更にこれらの第２カテゴリー各項目に「不十分」、「十分」、「良い」、「素晴らしい」の４つのグレードで指標が示されている。OFSTED の「授業観察の重要指標」の例として**表４**に OFSTED の第１カテゴリーの「教師の習慣」の指標を抜粋した[9]。教師はこの指標に合わせて授業づくりを行い、OFSTED の視察官から授業観察を受ける。イギリスの初等・中等学校では、この指標に則って授業が OFSTED から評価されるため、授業づくりにおいてこの指標に従わざるを得ない。よって、イギリスの高等教育

表４　授業観察―OFSTED の重要指標（key indicators）（抜粋）

教師の習慣				
項目	不十分	満足	良い	素晴らしい
教師の教科知識	教科知識において触れるべき差もなく、触れるべき誤解もない。	十分な教科知識を示している。	学習を支援するために教えること以上の知識を使用することができる。	学習を支援するための深い知識を使用し、能力のある児童を支援し、全ての児童のために学習を広げることができている。
目標設定に近い質問	児童に質問をしない。	授業の合間に児童に質問をしている。	目当てに近い質問をし、簡単な評価を行い学習を明確にしている。	目当てに近い質問が、理解のレベルを深めたり、思い違いなどを評価するために戦略的になされている。
幅広い質問	質問の幅を広げない。	授業の途中で幅広い質問をしている。	思考技能や問題解決、討論を促進するために幅広い質問を注意深くしている。	児童の学習と理解を広げるために幅広い質問を注意深くしている。
教師の見本提示	見本を示していない。	児童が期待していることを例示することができている。	見本を明確に提示し、見本が児童に期待していること、学習目的と達成規準がいかに見本と繋がっているか示している。	見本が期待していることを明確に示し、学習目的と達成規準がどのようにしたら適合するか示している。
フォーカス集団との作業	特定の焦点を当てた集団を支援していない。	授業中特定の集団を支援し、個別の課題を主として課している。	授業全体を通して特定の集団の学習を支援している。	授業の始終、学習している集団の学習を重点的に強化している。
話す・聞くの活用	話すことも聞くことも戦略として使用していない。	話すこと聞くことを少なくとも１回戦略として使用している。	学習支援として話すこと聞くことを効果的に使用している。	児童の学習を明確にするために話すことと聞くことを戦略的に効果的に使用し、注意深く選んで使用している。
提供された学習スタイル範囲	学習スタイルが提供されていない。	今までの学習スタイルが使用され、児童から表現したり反応する機会があった。	児童が学習スタイルを使って授業中に表現する特定の機会があった。	授業の始終児童が学習スタイルを使って表現する機会が計画され、児童が好みで学習スタイルを選んでいた。
授業のペース配分	授業の見通しが立てられず授業が終わったもしくは時間を越えて終わった。	授業は明確な構造をもち時間通りに終わった。	授業は明確で適切な構造化ができており、各項目が最後に確認され、授業中児童が参加し続けることができるよう支援されていた。	授業は効果的に構造化され、授業への決定や継続の意味が含まれていた。

の教職課程においても学生がこの指標を理解し実践することが教師になる上で重要となる。このことが画一的な教師を生み出し、創造性の欠ける教師の育成という課題を生み出している。そのため、この点を解決するため、学校区の中もしくは知り合いの教師とネットワークを作り、授業づくりの相談をしあうという取り組みも学校や教員個人で生まれた[9]。

3．教師が作る学習者のための自己評価フォーム

OFSTED の指標が授業づくりの基盤となっているイギリスの現状の中で、St. Nicholas' Chanty Primary School は、児童に自己評価指標を作らせる取り組みをしている。学習評価について校内での研究意識が高まったことが背景にあるという。取り組み例として、児童に消費者が最高の服を購入するためのポスターを描かせ、児童自身に自己評価指標を作らせている。**表５**がその授業で児童が作った自己評価指標である。

児童による自己評価指標作成の取り組みから見えてきたことは、

・児童３人から５人で活動すると良い
・児童は自分自身の学習をモニターし進歩した
・学習能力の高い児童の作業に偏ってしまう
・作業の途中から児童が結果を求めがちになった（作業を早く終わらせようとした）
・教師の配慮のあるサポートが必要である

と学校の報告書には述べられている[10]。

興味深いのは、イギリスの教師が OFSTED の授業観察の指標に則った授業を創るのに労力が割かれていると思われる中で、学習者（児童）による自己評価指標の創造に挑戦していることである。

一方、同じくイギリスの Foxfield Primary School も学習者による自己評価指標の作成研究に力を入れている初等学校であるが、教師による教師のための学習自己評価指標を作るには、教師のリーダーシップと協働が欠かせないという。当該学校は中堅教諭がリーダーシップを取り、レビューを繰り返しながら自己評価指標を作成してきたという。その際の教員間の討論ポイントは

・高い水準に達するための目標設定のためにいかに教師をサポートするか
・リーダーシップは共有文化をどのように作り出しているか
・効果的な授業とはどのようなものか
・コーチングとモニタリング
・パフォーマンス文化とは何か
・どのように教師の期待を明確にするか

であったという[11]。

Foxfield Primary School のこの討論は、OFSTED の学校視察が導入される前の授業観察で、学校が授業観察基準を作成し、経営陣や中堅教師が教員とともに対話とフィードバックを行っていた場面と重なりはしないか。即ち、学校現場の教師が校内で作った自己評価指標が、教員同士での対話を生み出していると考えられる。いわば、OFSTED の学校視察における授業観察基準が導入された以前の、校内における教員評価の授業観察基準と方法に授業の評価に対する考え方が逆戻りしているようにも捉えられる。

日本が教員育成指標を教育委員会と大学の教職課程で作成したとして、そこに学校現場の教師がどの程度参加するのか。教員育成指標が各学校の統一的な教員養成基準として位置づけられてしまうのか、教員同士で高め合う自己評価指標として活用されるのか。学校現場の児童生徒と教師の実態を十分に配慮し、まずは教員が児童生徒の成長のために努力しようというチーム意識をもち、それがお互いに教師の質の向上として高め合っているということが、教師に実感されるような教員育成指標の策定が進められていかねばならない。

表５　ポスターを作ろう：消費者は最高の服を求める（児童作成）

カテゴリー	金の星	金	銀	銅
要求される要素	ポスターは要求された要素を全て含んでいるだけでなく追加情報も含んでいる。	全ての要求された要素がポスターに含まれている。	だいたいの要求された要素が含まれている。	いくつかの要求された要素が見当たらない。
クラス時間の使用	時間を有効に使っている。プロジェクトはタイムスケージュール内に終わった。全て仕事ができている。	各授業時間を上手に使っている。他に比べて少しプロジェクトの焦点が薄い。	授業時間は普通に使われていた。他のプロジェクトに比べ焦点の当て方がふつうである。	時間のロスがある。プロジェクトが終わらなかった。
魅力	ポスターはデザイン、レイアウト、精密で期待以上に魅力的である。	ポスターはきちんとレイアウトされているがデザインに工夫がいる。	ポスターは魅力的だが整然としておらずレイアウトが乏しい。	ポスターは雑でデザイン性がない。魅力的ではない。

おわりに

イギリスにおける授業観察の評価基準の作成の変遷は、評価者と被評価者との面談重視、OFSTED のクライテリア（規準）とグレード重視、OFSTED の指標の重視、学校現場での自己評価基準を作成するという流れで進み始めている。OFSTED の授業観察基準のプレッシャーの中で学習の自己評価基準を作り始めた初等学校の取り組みには、教師としての専門性向上の意識の高さが窺われる。今後の課題としては、OFSTED の授業観察の指標は学校現場での学習の自己評価基準作成に影響しているのか、教師による教師のための授業の自己評価基準を創る学校と、学習者による学習者のための自己評価基準を創る学校の差は何か、OFSTED の学校視察のプレッシャーの中、学習や授業の自己評価基準作成に挑戦する学校と他の学校との差は何か、最終的に大切なのは、学校内での教師同士の協働であり、授業観察基準の変遷初期の評価者と被評価者との面談や対話重視の意義に戻るのではないか、などの検討が挙げられる。

更には、本稿で挙げた学習者の自己評価指標を創った初等学校では、学習者に自己評価基準を創らせる上では、学習レベルの差という課題があると言及していた。OFSTED が学校の視察基準を統一したのは全ての学習者の学力の底上げを図るためであった。学習者による自己評価基準が全ての児童生徒に役立つものとなるためには、児童生徒自身が自己評価基準を解釈する力が必要である。その意味では、学習や授業の自己評価基準によって学習者間に再び学習格差ができるのも避けなければならない。イギリスの学校の授業に関する基準作りの取り組みを更に検討し続ける必要がある。

引用文献・註

1．文部科学省（2015.12）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（中教審第184号）（2017年10月入手）
http://www:mext.go.jp/b-menu/shing/chokyo/chukyo0/toushin/1365665.htm

2．イギリスでは学校視察制度における授業観察について classroom observation もしくは lesson observation という用語を使用する。本稿では日本語訳として「授業観察」で統一して使用する。

3．拙稿、「英国における School Inspection―教師の意識調査にみるその意義と問題点―」、九州教育学会研究紀要、第24巻、1996年。

4．拙稿、「イギリスにおける教師の自己評価に関する一考察」、日本比較教育学会紀要第29号、2003年11月。

5．Cumbria County Council, 1989 “Techer Appraisal Handbook in Cumbria.

6．King,S, 1996 “Classroom Observation-Occasional Papers in Teacher Education and Training”, Institute of Education University of London, 1996, p.25.

7．拙稿、日本比較夷教学会紀要、2003年。

8．Ofsted “Lesson Observation - Ofsted Key Indicators”（2017年11月15日入手）

9．青木研作、「イギリス保守党政権下のティーチング・スクールによる学校支援―政策的背景と実態についての検討」、日本比較教育学会第54回大会発表レジュメ、2018年６月23日、於広島大学。

10．G.Fleming,”Rubrics:a self evaluation tool that supports children’s learning”、St,Nicholas’ Chantry Primary School.（2017年11月15日入手）
http://www//standards.defs.gov.uk/ntrp

11．Foxfield Primary School and Woodhill Primary School, 2017 “Improving the Quality of Teahing Using an Evidence Based Approach”（2017年11月15日入手）
http://upload.reactcdn.co.uk/foxfield/ uploads/document/2-0-improving-the- quality-of-teaching-using-an-evidence-based-approach.pdf